

高瀬神社 社報

越中一宮

第49号

越中高瀬神社
一宮

平成 28 年 4 月 1 日
<http://www.takase.or.jp/>

撮影：南部スタジオ

社頭講話

「新しいということ」

宮司 藤井秀弘

いつの間にか冬から春へと季節が変わりました。「暖冬だ」「冷夏だ」と人間の騒ぎに関係なく四季は移りゆきまです。今年もまた新たな春がやってきました。

この四月から孫が新社会人になりました。先月、就職先の新入社員研修があり、張りきって参加していました。

新入社員、新入生、新年度、新学期など、この「新しい」というところに大きな力が籠っています。例えば新入生や新入社員は一樣に希望に満ち溢れて、力がみなぎっているように見えますし、進級した子供たちも毎年同じようにやって来る新学期であっても、あらためて頑張るぞという気持ちになっていると思います。

NHKの連続テレビ小説『あさが来た』をご覧になっていた方も多いと思います。ヒロインの白岡あさは、当時の日本国内で次々と新しい事業を立ち上げ、時代をリードした女性でした。持前の好奇心旺盛な性格と、やはり「新しい」というところから力をもらって数々の成功を取めた方なのではないでしょうか。

平成二十五年に行われた伊勢の神宮の第六十二回神宮式年遷宮は神様のお住まいである御正宮（本殿）をはじめ御装束・御神宝などすべてのものを新しくして、神様の力を再生していただくという御祭儀でした。ここにも「新しい」に籠る特別な力を見ることができます。

自然の中で季節は毎年繰り返しますが、特に春は新たなスタートの季節で目にする何もかもが初々しく、力強く、希望に溢れているように映ります。年寄りの私でさえ、この時期は、あれもしようこれもしようと思いが募ります。毎年廻りくる同じ季節なのに新しいというだけでワクワクするから不思議です。

厳しい冬から暖かな春に移ろうゆえに春は一段と喜びが大きいのですが、次々と新たにやって来る季節に次々とやりたいこと、したいことなど出てきます。しかし、何から手をつけようかと迷っているうちにその季節が過ぎ去ってしまい、来年に持ち越しということもしばしばあるようです。

「初志貫徹」＝初めに心に決めた志を最後まで貫き通すことです。新しい季節を迎えて、あれこれ実行しようと考えているうちに日々の雑事に紛れ、初々しい希望に満ち溢れた気持ち日が追うごとに薄れてしまい、ついには実現

出来なかつたという結果にならないようにしたいものです。

気持ちが萎えると良いことは起こらず、様々な煩わしいことが寄ってくるものです。この様なことにならないためにも、新たに廻り来た季節からその都度新しいパワーをもらって、気持ちを常にリフレッシュさせることが大切です。春は次々に咲く花々、夏は深まる緑や眩しい太陽、秋は次々に出てくる美味しい食べ物、冬は朝日に輝く新雪の美しい風景など、大神様にいただいた森羅万象、世の中に無駄なものはなく、気持ちを生き返らせるものがたくさんあるはずですよ。

春本番となるこれからの季節、『新』と付くもの全てから力をもらい、更にあちこちに目を配って、人や自然、社会の中での出来事が何かと示唆を与えてくれることに気づき、これを力に変えて元気に過ごしたいものです。

神宮撤下御装束神宝下附奉告祭

「第六十二回神宮式年遷宮」における月讀宮以下十二別宮の「遷宮祭」完遂を受けて、此度、全国の神社に「御装束神宝」が下附されました。当神社においても四点下附賜り、平成二十七年十二月二十一日、神宮司廳にて執り行われた「下附式」に宮司と責任役員が参列しました。

これをうけて、十二月二十八日午前九時より御本殿において「神宮撤下御装束神宝下附奉告祭」を斎行し、神宮より下附された旨を御神前に奉告しました。

下附された「御装束神宝」は、宝物殿に収蔵し大切に保管します。現在、宝物殿展示品の整理作業を進めており、終了したところで公開する予定です。



一、撤下御装束神宝 四点

- | | | |
|-----------------|--------|----|
| 皇大神宮御神宝 | 革御鞆 | 壺腰 |
| 皇大神宮別宮 伊佐奈岐宮御装束 | 御櫛笥 | 壺合 |
| 皇大神宮別宮 瀧原宮御神宝 | 銅黒造御太刀 | 壺柄 |
| 皇大神宮別宮 瀧原竝宮御神宝 | 梓御弓 | 壺張 |

皇大神宮御神宝

革御鞆

壺腰



皇大神宮別宮
伊佐奈岐宮御装束

御櫛笥

壺合



皇大神宮別宮
瀧原宮御神宝

銅黒造御太刀

壺柄



皇大神宮別宮
瀧原竝宮御神宝

梓御弓

壺張



節分祭

二月三日午後三時より「節分祭」が斎行されました。例年、この時期は「節分寒波」に見舞われますが、本年は「立春」らしい暖かな陽気に包まれ、積雪の無い「節分」となりました。祭典では祝詞奏上、神楽「剣の舞」の奉奏に続いて、神職と巫女、責任役員、相談役が「福豆」を撒きました。

祭典後、各家庭に災いなく福が来るようお願い、参拝者には「福豆」と、鶴亀の絵柄が入った「福飴」が授与されました。



紀元節祭

皇紀二六七六年二月十一日午前十時より「紀元節祭」が行われ、神武天皇の建国の偉業を偲び、日本の繁栄と世界の平和を祈りました。

本年も福野松風会（大聖寺弘会長）が建国を祝い、吟詠を奉納しました。



奉納曲

【御本社】
「春風」白居易
「紅葉館にて饗飲席上率に賦す」
国分青厓

「山行同志に示す」草場佩川
「春夜洛城に笛で聞く」李白
「江南の春」杜牧

【功霊殿】
「新正口号」武田信玄
「寒梅」新島襄

祈年祭（大祭）

二月十七日午前十時より「祈年祭」が斎行され、氏子崇敬者約四十名と共に、一年の五穀豊穰と産業発展を祈り、国家の安泰を願いました。

祭典では神楽「浦安の舞」の奉納に続き、井波松風会（斎藤彰岳会長）の吟詠が奉納されました。

奉納曲
「立山を望む」国分青厓
「勧学」陶潜



鎮火祭



三月八日午前十時より「鎮火祭」を斎行し、氏子・地元消防関係者約二十名が火の恵みに感謝し、一年の無火災を祈りました。

御本殿での祭典の後、鳥居前にて「鎮火行事」を行いました。「心悪しき子の心荒びし時は、水神、匏、埴山姫、川菜を持ちて鎮め奉れ」との故事に基づき、権宮司と南砺市消防団井波方面団高瀬分団・岩倉清孝分団長が瓢の「水」をかけ、続いて笠田武司副分団長が「川菜」を、次に森田松司班長が「土（砂）」をかぶせ消火し、行事を終えました。

平成二十八年 初詣

暖冬となった今年は三が日全て晴天に恵まれ、氏子の田邊良三さん（大正十四年生）は「雪の降らないお正月は生まれて初めてだ」と、話しておられました。雪のない境内には、富山県内をはじめ石川県や岐阜県からも多くの参拝者が訪れ、三が日は約二十万人の人数で賑いました。

本年も南砺警察署をはじめ、関係各位のご協力により、事故もなく初詣期間を終える事が出来ました。

七十七名の奉仕巫女さんたちは、清々しい笑顔で参拝者をお迎えしました。



初詣句会

一月三日、福野糸瓜句会（梅島くにを会長）の「初詣句会」が開催されました。奉納句は次の通りです。

笙脇に置きて楽人暖炉に手
 ふくらめる花の封筒初便り
 結界に阿吽の獅子や淑気満つ
 拝殿の風に撫でられ冬ぬくし
 立山の雲朱に染めて初日の出
 早暁の一村つつむ冬霞
 挨拶の他人めくなり屠蘇の膳
 人波に雅楽高まる初詣
 舞初や鶴の羽博く所作ありて
 前向きに生きん八十路の去年今年
 佳きことを書き綴りたし初日記
 彫初の鑿七十本塵もなし
 初夢の母懐かしく一句詠む
 流れ行く雲の彼方を恵方とす
 初句会床にゆかしき神鼓あり
 今年また三年日記求めけり
 ひらき初む臘梅の香のただよえる
 初御籤にやりと笑ふ高校生
 うす紅をさして傘寿や初詣
 献灯の並ぶ神苑淑気満つ
 三日早や句会に参ず肅として

梅島くにを
 森田 桂子
 今井 淳良
 田上真知子
 中川 英堂
 有川 寛
 直井 春枝
 佐々木春子
 武田東洋子
 窪田 悦子
 五十嵐千恵子
 藤澤 佐世
 長井美智子
 宇野 恭子
 長谷 登世
 大浦 昌美
 澤田 敦子
 名村 五月
 波多 昌子
 岸沢 溪泉
 尾崎 悦子

加越線について

加越能鉄道(株)加越線は、富山県西部の小矢部市石動、砺波市庄川町青島間を結んでいた鉄道です。

大正四年に開業し、昭和四十七年に廃業になるまで社名を変えながらも約半世紀の間、当地方の主要な交通機関でした。当社社前にも高瀬神社駅が設けられ、初詣では大勢の参拝者の足となりました。

しかし、自動車の普及が進むにつれて経営が悪化し、昭和四十五年廃線が通告されます。対して沿線地域の関係者は、加越線廃止反対運動を展開しました。昭和四十七年に廃線となりました。(権禰宜 魚岸一弥記)

高瀬村と加越線

元加越能鉄道社員 岩倉善三

現在の砺波市青島町を起点とし、あいの風鉄道「石動駅」迄の延長、一九・五kmが開通したのは、大正十一年七月、廃線になったのは、昭和四十七年九月です。

県西部の発展に寄与した加越線は実働五十年二ヶ月でその使命を終えたのです。

高瀬村の交通手段は加越線以外に無く、毎日の通勤、通学、通院、買物、高瀬神社への初詣、瑞泉寺の太子伝会、夏の海水浴、福野の夜高祭等満員の利用客の姿を忘れる事はありません。

誠に失礼な視点ですが、現在でも、富山、高岡よりも金沢に重点を置いて生活されている方々が多く居られます。昭和二十年当時も加越線の使命は如何に速く、安全に、青島、井波、城端、福光、福野、津沢の方々を金沢に運ぶかに掛かって居りました。

私達は、利用者の皆様の要望にいかに応えるか、毎日真剣に創意工夫し、車輛の改良整備、運転技術の向上に努めました。

特に冬期間の除雪には苦勞しました。三八、四二豪雪等、雪との戦いは今日でも夢に出て来ます。また忘れられないのは、加越線廃止の年、今は亡き妻が末っ子をオンブして高瀬神社駅に、終列車迄毎日迎えに来てくれて居た事を乗務員から聞いた事です。

私は、終戦の年の昭和二十年八月、海軍予科練から家に帰り、出生地の北山田の村役場に就職し、GHQの指示に従い、在郷の日本刀・劍銃・ピストルや日本書紀・古事記等収容する、敗戦日本の残務整理を行って居りました。その年の末、父や当時の加越線所長の塚本佐一郎さん(当時村議、副議長)の進言や、恩師の富山県立福野農学校校長石黒大俊先生の励ましを受け、当時の富山地方鉄道、加越線青島機関区に再就職しました。職場には、満鉄、北鉄、海軍、陸軍、ビルマ戦線等より復員され、復職された方が十一名も居られました。最も強く胸を打ったのは、前機関区長、湊さんが戦死され、遺骨となつて奥さんのもとに帰つて来られた時のことです。このことには、

涙が止まりませんでした。大切な夫の死、今後の生活費、更には現在生活している区長社宅も出なければならぬという三重の苦しみです。当時の機関区長の砂田武雄さんは非常に奥床しき方で、自身は福野の自宅より通勤され、五年余り湊さんの子供さんが成人就職される迄、区長社宅を譲つて居られました。

機関区に就職した私の仕事は、事務一般と資材係の兼務でした。私は給水・給炭・機関車の煙突掃除・炭殻整理・車輛の修繕助手・機関助手、運転手見習、蒸気機関車蒸気洩の修理や内燃機関の分解整備等も教わりました。また運転手と話し合つてダイヤの編成も行いました。当時の加越線の状況を申し上げますと一番困つたのが燃料でした。

加越線の動力は、一つめは内燃機関、二つめは蒸気機関です。当時は日本国内にガソリンが無く非常に痛手でした。

そこでガソリンの代りに木炭ガスを使用しました。木炭車の事を私達は代燃車と呼びました。購入して戴いた木炭は、湿気が多く、朝、着火しにくいのです。

運転手は朝早くから起き、各自車輛の発生炉に木炭を投げ込み、ガス発生炉の風車を手で廻すのですが、早くて二十分位、どうかすれば三十分位、火がガス発生炉に廻らないのです。青島町の朝は庄川嵐の為、特に寒く発生迄乗務員は大変でした。そこで私は木炭を入れ終えた後に空になった俵を切つて発生炉

に入れてみたのです。木炭の間に俵が入ったので着火が良くなり、女性の車掌さんに喜ばれましたが、空の俵が無くなってしまうので、何俵使用したか解らないと言われ、木炭入庫の際に私が立合い番号札をつけて私の所で管理する事になりました（この木炭倉庫の整備が大変で臨時人夫長井外吉さん外二名で二日間かかりました）。

二つめの蒸気機関用燃料の石炭は数が少なく配給制でした。私と営業所の水口さんと大浦さんは、週に一度、富山県庁商工課に行き、必要資材の油類、



昭和十六年

高瀬神社初詣臨時列車の様子

石炭等の配給伝票をもらいました。水口さんや大浦さんは、伏木港に向い、私は配給のオイルや、車輛の修繕資材、石綿等を受け取るため南富山倉庫に行きました。潤滑油、機械油等を一斗缶二本で受け取り、北陸線に乗りますと、油の匂いが充満し満員の乗客から何回も嫌味を言われました。

状況を見ておられた国鉄の車掌さんは、親切に緩急車（列車にブレーキをかけるための装置）が取り付けられた車輛）に乗るように手配して下さり、昭和二十一年から二十五年まで約五年間、お世話になりました。

一方、石炭は伏木港から無蓋車（屋根のない貨車）で青島駅に運ばれますが、当時、良質の石灰が少なく、主となるものは三級石灰、亜炭でした。亜炭は火力が弱いのです。亜炭の中に乾草（牧草を乾燥させたもの）のような物が多く含まれ、直ぐ燃えるし、火が煙突より吹き出すのです。風の有る日は特に火の粉が下手に飛び、非常に危険でした。私達は悪質の亜炭と、少し良質の石炭を混合したり、濡れた木材と併用したり、機関車の煙突には、金網を掛けたり

して事故防止に努めました。

この様なことから、会社上層部も真剣になり、当時の営業部長の清水さんが、加越線のディーゼル化に非常に力を尽して下さいました。

当時の代燃車キハ一、二、三号車に、イスズトラックの三十馬力エンジンをつけられないか、私に調査するよう指示されたので、当時、地鉄稲荷町バス営業所にあつたイスズエンジンを詳細に調べました。一部部品の取替で取付が可能である事が解つたので、図面を書き、必要経費を算出して提出しました。清水部長は非常に喜び、早速キハ三号車に取りつけるよう指示

され、私は当時、元海軍機関兵の辻田政信さんと二人でエンジンを受取り、青島町機関区に於いて作業を行い、ついに成功しました。これが私の車輛改造の第一歩となりました。

後にキハ一、二号車のエンジン取替作業を進めるに伴い、清水部長の信頼を受け、指示によりキハ十一号車（後にキハ七七五一に変更）に当時、日本で最も進んでいた日野DA五四型のエンジン取付に成功しました（出力が七七馬力と強いのです

が当初エンジンの高さが高く取り付けられないと言われていた）。

また清水部長は蒸気機関車をディーゼル機関車に入替えたいので、一度、大阪の汽車会社を見て、エンジンや機関車の構造を検討して来たかどうかと指示を下され、私に当時の汽車会社製造副部長阪野幸太郎さんの名刺を下さいました。

私は昭和二十五年四月運転手の、四塚為雄さん、年代孝信さん、和世榮三さんの三氏と大阪の汽車会社を訪れ、阪野副部長の案内で、製作現場や当時国鉄が開発を進めていた振興ディーゼルエンジンの説明を受けました。振興ディーゼルエンジンはその後、国鉄気動車の主力機関となりました。

大阪の汽車会社から帰って清水部長に報告し、いよいよディーゼル化の時代が来ると強く意識し、職務に真剣に取り組む中、大変な事が起こりました。

後に富山一区代議となられる地鉄社長の佐伯宗義さんが、昭和二十五年十月に加越線を切り放して、加越鉄道という子会社にするというのです。

(次号に続く)

初詣旅行

一月十八日より、氏子崇敬者の皆様と二泊三日の日程で、初詣で賑う伊勢の神宮をはじめ、熊野速玉大社、熊野本宮大社、熊野那智大社を参拝しました。

初詣旅行期間中は冬型の気圧配置が強まり、今季最強の寒波が到来しましたが、伊勢・熊野の地はその影響を受ける事なく、穏やかな気候の中、参拝を終える事ができました。



牛嶽講演会 「牛嶽の歴史とよもやま話」



砺波市、南砺市、富山市の堺にそびえ、当神社の奥宮として鎮座する牛嶽（九八七メートル）。二月二十一日、参集殿に於いて牛嶽を題材にした講演会、「牛嶽の歴史とよもやま話」が開催されました。

藤井秀弘宮司が牛嶽の山岳信仰などについて、周辺の地勢や伝承を基に講演し、主催した砺波登高会（温井満会長）会員や登山愛好家七十名が、慣れ親しんだ山の歴史に理解を深めました。

越中の郷土料理②（ベッコウ（えびす、ゆべし））

先人から大切に受け継がれてきた和食は、日本人の伝統的な食文化です。第二回となる今回は、お祝い御膳に華やかに並ぶ「ベッコウ（えびす、ゆべし）」をご紹介します。

ハレの日の御膳には欠かせない郷土の料理。私が子どもの頃は、祖母が作ってくれていた思い出がありますが、最近ではあまり見かけなくなつたように思います。

その名の通り鼈甲に似ていることから、ベッコウと呼ばれます。その他の呼び名もベッコウから変化したといわれています。

江戸時代の女性はアクセサリを持ちませんでした。唯一身に着けた装飾品がカンザシです。鼈甲はその材料にもなりません。今日でも花嫁の白無垢姿では、鼈甲のカンザシが、宝石のように輝いています。

当時は高価な鼈甲カンザシを、庶民が準備するのは難しかったです。せめて身近な食材で似せて作る事ができたなら・・・。そんな思い出でベッコウが生まれ、受け継がれてきたと考え、先人たちの料理に込められた熱い思いが伝わってくるようです。

調理法はシンプルで、出汁に寒天を溶かしたものに砂糖と醤油で味をつけ、卵を流して固めるだけです。お好みで生姜を効かせても良いでしょう。

いろいろな料理があふれている今だからこそ、先人たちの心の込められた料理を大切にし、作り続けていきたいと思えます。

出張料理 たけや
代表 竹内秀訪



— 今月の言葉 —

今月より「今月の言葉」と題しまして、先人が残してくれた、また受け継がれてきた「言葉」を当神社社頭において配布することになりました。

古今東西の先人達が残した名言や格言は、時代を越え、現代に生きる我々まで脈々と伝えられてきました。そこには、先人の信念・行動・経験が詰まっています。心に沁みる言葉・教訓となる言葉は、人としての生き方や、物事の真髄、普段忘れがちで大切なことなどを教えてくれます。お参りの際には、社頭にて手にとってお読み下さい。

今月の言葉

平成二十八年四月 月まいり

笑う門には福来る

（いつも笑いの声があふく、町が賑わったとき、自然と笑顔が溢れるということ）

あなたの人生に、神社がある。

越中一宮 高瀬神社

ご祭神「大國主命」のお顔は絵でも像でもニコニコと笑ったお姿です。大國主の「笑い」は「和」がもたらされることによっても生じることから「和が来る」と書いて、「和家」としています。「和」は「輪」に通じ、和五（ニキタレス）のようなものは輪が切れるとバラバラになってしまう。「和」がなくなってしまう。

ご案内

奉納

○古代米「御神稲」

富山市婦中町

松田 久男殿

池田 栄蔵殿

平成二十七年十二月二十八日

○「初穂米」

南砺市土生新

奥野平喜知殿

平成二十八年一月四日

○拝殿「提灯」

氏子

森田 松司殿

岩倉 和弘殿



○境内「初詣参道用提灯」
南砺市本町

大野洋傘提灯店

大野 勇吉殿

平成二十八年二月七日

戌の日 (安産祈願)

4月 10・22日
5月 4・16・28日
6月 9・21日
7月 3・15・27日
8月 8・20日
9月 1・13・25日

腹帯のお祝いも行いますので
ご持参下さい。

辞令

石渡 和貴

見習出仕を命ずる

井元梨恵子

見習巫女を命ずる

平成二十八年四月一日

編集後記

次号で五十号(記念号)を迎えます。今後もより魅力的な紙面となるよう、努力いたします。

【表紙写真】一の宮の桜

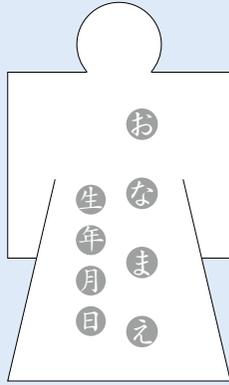
「平成二十八年夏越の大祓」のご案内

なごし おおはらえ

日時 六月三十日(木) 午後三時より

「大祓」は、知らず知らずのうちに犯した罪穢を半年に一度
祓い落として元の清らかな心身に戻り、続く半年も健全に過ご
せるようお願いする神事です。

拝殿にて「大祓詞」を奉唱し、各人が「人形」に罪穢を移し、
特に「夏越の大祓」は前庭に設けられた「茅の輪」をくぐり、
心身を清浄にもどします。これからの暑い夏を健康に乗り切る
ための大切な神事です。どうぞご参列下さい。



※ご希望の方には案内状と人形を送付いたしますので、
社務所までご連絡下さい。(〇七六三) 八二一〇九三二

第十七回 人形感謝祭のご案内

にんぎょつかんしゃさい

日時 七月十七日(日) 午前十時より

古くなった人形に感謝し、神社へ納めるお祭り「人形感謝
祭」を行います。納められた人形はお祓いの後、お焚き上げ
をしてお別れします。子供の成
長とともに使わなくなったり、
壊れたりした「人形」や「ぬい
ぐるみ」をご持参下さい。

受付

午前九時から午前十時まで
(当日のみ受付)

祈願料

三千円からご志納願います(みかん箱一つ程度)

※大量にある場合や大きなものについては、
事前に社務所へお問い合わせ下さい。

(〇七六三) 八二一〇九三二



第十六回 人形展(一期一会)
七月十六日(土)〜十八日(祝) 開催
「午前十時〜午後四時」



参議院議員
前国務大臣
山谷 えり子

「拉致問題解決への想い」

昭和五十二年十一月十五日、新潟から当時十三歳の中学生だった横田めぐみさんが北朝鮮に拉致されてから、早や三十八年という年月が過ぎてしまいました。

平成十四年の日朝首脳会谈で、北朝鮮が初めて拉致を認め、北朝鮮が初めて拉致を認めた際の小泉訪朝により、同年十月十五日に北朝鮮による拉致被害者五名の方が帰国されました。

あの日、政府専用機のタラップから蓮池薫さん、祐木子さん夫妻と地村保志さん、富貴恵さん夫妻、曾我ひとみさんの五人が下りてこられた光景に、重く閉ざされた扉がやっと開かれたような感覚を覚えたことを昨日のこのように思いだします。

しかし、当時北朝鮮は拉致を最初から認めただけではありませんでした。何時間にもわたる両国の議論が一向に歩みよりなく、昼休みに控室に戻った際、安倍官房副長官（当時）は、控室が盗聴されている可能性を意識して、「金正日委員長が拉致に対する国家的関与を認め、謝罪をしないのであれば、平壤宣言への署名を考え直さなければならぬ」といいます。今すぐ帰りましょう」と発言し、これがきっかけで北朝鮮が拉致を認め、五人の帰国へと結びついたのです。

その後、御家族が帰国され、その他の拉致被害者の帰国も次々に実現すると誰もが期待をしていたに違いありません。

皇后陛下は、平成十四年に五名の拉致被害者が帰国された年の会見で「一連の拉致事件に関し、初めて真相の一部が報道され、驚きと悲しみと共に、無念さを覚えます。なぜ私たちが皆が、自分たち共同社会の出来事として、この人々の不在をもっと強く意識し続けることができなかつたかとの思いを消すことができません。今回の帰国者と家族との再会の喜びを思うにつけ、今回帰ることのできなかつた人々の家族の気持ちは察するに余りあり、その一人の淋しさを思います」と仰いました。

帰国された際に曾我ひとみさんは「北朝鮮と日本は、飛行機で行けばたったの二時間足らずでいくことができます。だけど私は、二十四年間助けを求めて、毎日、毎日暮らしてしましました。まだ、私の母をはじめ拉致被害者の方々は、あの北朝鮮で月を見ながら、星を見ながら「いつになったら、誰かが迎えに来てくれるんだろう」といつも思いながら待っていると思います。・」とお話しされました。

拉致被害者救出のシンボルであるブルーリボンは、近くて遠い

国の関係である日本と北朝鮮の間で、空と海の青（ブルー）が国境無しに続き、拉致被害者ご家族が空を見上げて再会を思っていることを意味していません。

私が国会議員を志した大きな理由の一つが、拉致問題の解決でした。

家族会、救う会の皆さんと、悔しさ、怒り、淋しさを胸に集会や街頭での署名活動など、どれほど長い年月、行動を共にしてきたことでしょうか。

「対話と圧力」行動対行動の原則をもとに、昨春に日朝政府間協議を再開し、一年半が過ぎました。

担当大臣として、今年五月に訪米した際には、司法長官や国連の事務副総長らと意見交換をし、ニューヨークでシンポジウムも開催いたしました。

国際社会で拉致問題の解決を求める機運が、これまでになく高まってきております。

拉致問題担当大臣を離れても、引き続き一日も早い被害者全員の帰国のために、国民の皆様とともに心を砕きながら、戦っていく所存です。

たまじやり
玉砂利を踏みしめ進む ～参進の儀～



境内には清浄さを保つため、きれいな石「玉砂利」が敷きつめられています。

清浄な石を踏みしめ進むことによって、身を清め、心を鎮めて気持ちを整えながら参進します。

巫女の先導による～参進の儀～

お二人の幸せにむかって、参進から結婚式がはじまります。

縁結びの神様に誓う
伝統の結婚式を挙げていただく、
一生に一度の日だからこそ、
一日一組のカップルの為だけに、
このバンケットは生まれました。



一日一組限定の

おもてなしバンケットホール

このバンケットホールでのご結婚披露宴のご予約を承っております。
お気軽にお問い合わせ、ご相談いただけますよう、お待ち申し上げます。

只今
秋・冬の婚礼
ご予約
受付中

あなたの人生に、神社がある。越中一宮高瀬神社

〒932-0252 富山県南砺市高瀬291
ご予約はTEL0763-82-1131

高瀬神社 🔍 検索